広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第51号　2002　53－60

幕長戦争段階における木戸孝允の政治構想

田　口　由　香

(2002年９月30日受理)

The political concept of Kido Takayoshi in the war between Tokugwa shogunate and Choshu-Han

Yuka Taguchi

On this paper, I considered the political concept of Kido Takayoshi in order to reveal when he planed for the Tobaku. He intended that the war between Tokugwa shogunate and Choshu-Han prevented Tokugawa shogunate from recovering his authority. After the War, he required Tokugawa shogunate to return administrative power to the imperial court. He designed that the nation united around the imperial court in pressure of foreign countries. A result of consideration, this paper revealed, although he did not plan for the Tobaku, he planed to eliminate Tokugawa shogunate for achieving the Oseifukko.

Key words: Kido Takayoshi, Bakucho-war, political concept, Bakumatsu, Choshu-Han
キーワード：木戸孝允，幕長戦争，政治構想，幕末，長州藩

はじめに

明治維新史研究では，幕末期において討幕を推進した政治的主体が，どの時期に討幕を志向するようになったのかを明らかにすることが課題となっている。1960年代の研究では，政治的主体を「尊攘派」から「討幕派」への発展と捉え，長州藩における元治の内乱後に討幕派が成立したとし，薩長盟約を討幕のための軍事同盟と位置づけていた[1)]。それに対して1980年以降の研究では，元治の内乱後における討幕派の成立を否定し，慶応３年段階に政治的主体の討幕志向を見出すようになっている[2)]。そして，慶応２年，長州藩が幕府と戦火を交えた幕長戦争は，長州藩の「政治的復権」を勝ち取るための「抗戦」と位置づけられている[3)]。

これまでの研究においては，長州藩における「討幕派」成立の有無や薩長盟約の評価に焦点があてられ，その後の幕長戦争の位置づけもそれらに規定されてきた。しかし，討幕を推進した政治的主体は，対外的危機情況において，外交上の失政を重ねる幕府に対して国家存亡に関わる危機を感じていた。幕府と政治的主体との対抗は，対外的危機との関わりのなかで進展したのである。よって，討幕志向の時期を明らかにするためには，対外的危機情況における両者の対抗に焦点をあてる必要がある。その上で，政治的主体における幕長戦争の位置づけ，対外的危機情況に対する国家構想を検討することで，幕府の存在をどのように認識したのかを明らかにできると考える。

本論文では，慶応２年１月から慶応３年１月までを幕長戦争段階として，長州藩において討幕を推進した木戸孝允が，幕長戦争をどのように位置づけ，対外的危機に対してどのような国家体制を構想していたのかを検討する[4)]。木戸は，長州藩政府において，用談役として藩論決定の中枢に位置しており，長州藩の方針には木戸の意見が反映されていたと考えられる[5)]。また，木戸は，長州藩内外の政治的主体と密接に連携をとりながら政治活動を行っており，彼等と政治構想を共有していたと考えられる。よって，本論文では，木戸の政治構想を，長州藩の方針，木戸と連携をとっていた政治的主体の構想とともに検討する方法をとる。

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：三宅紹宣（主任指導教官），佐藤眞典，小尾孟夫，下向井龍彦，中山富廣，頼　祺一
（文学研究科）

1．幕長戦争における長州藩の方針

慶応元年4月，将軍家茂の進発が決定した。長州藩では，「今般大樹御進発之趣意に付ては成丈理非御弁解可相成候得共，理不尽致乱入に於ては無拠一戦に立至[6]」ると，幕府軍が領内に乱入した場合には抗戦に及ぶことを藩内に告示し，薩摩藩を介した武器購入に尽力していた[7]。さらに幕府が，慶応元年9月の長州再征勅許に続き，慶応2年1月22日に処分令の勅許を得たことで，幕長関係は切迫した情況となる。幕府との抗戦を想定していた長州藩は，幕長戦争に対してどのような方針を採っていたのか，木戸の意見とともに検討したい。

幕府や諸藩に対する長州藩の対応は，第二奇兵隊暴動の対処に端的に表れている。長州藩は，処分令受諾に関して幕府から二度目の広島召致が命じられていた。そのなかで，第二奇兵隊が，4月5日に情況突破を図ろうとして脱走し，9日には倉敷の幕府代官所を襲撃したのである。木戸等の藩政府員は，この事件が「後来之條理にも相拘」るとして，第二奇兵隊の脱走を幕府へ届けることを「衆議」の上で決定している[8]。幕府には，「條理」を尽くすことで，建前としては恭順の姿勢を示そうとしたのである。

また，木戸等は，備前藩がこの暴動により「疑惑」を生じることを懸念した[9]。木戸が作成した開申書では，「自然右徒浮浪之者虚言を構へ，万一も寡君之微誠をも相汚し候様に而は重々難忍次第に付，何卒此段は御垂了被成下[10]」と，暴動を「浮浪の者」の「虚言」とし，備前藩に理解を求めている。これは，「政府之命トタバカリ外聞疑惑ヲ生シ[11]」たと井上馨が述べていることから，第二奇兵隊が，政府の命令で幕府代官所を襲ったと公言していたと考えられる。それを「浮浪の者」の「虚言」として弁解したのである。さらに，井上は，他藩に「疑惑」が生じたことを「大罪」とし，「仮令多人数迚モ必厳科ニ御処置」すべきと第二奇兵隊の厳罰を主張した。長州藩政府は，4月22日，次のような処罰案を出している。

> 不一形御国辱に立至り，既に昨年来幕府向御応接振，其他飽迄御條理被為立抜，漸々御正義相輝候辺へも余程関係せしめ，又々世間疑惑之端を開き，彼是御国恩を忘却し，不忠不義之至可悪之事に候（中略）他藩へ之響合にも相係り候儀故，分明相知候上は速に誅伐梟首をも被仰付候事[12]

これまで，長州藩は，幕府に対して飽くまで「條理」を立て，「正義」を示してきた。藩政府は，第二奇兵隊の暴動が，幕府に不信感を与え，さらに他藩にも「疑惑之端」を開いたことを危惧している。したがって，「他藩へ之響合にも相係」るとして厳罰を命じ，この暴動が長州藩の意向ではないことを他藩に弁解しようとしたのである[13]。

長州藩が，第二奇兵隊暴動の弁解に尽力したのは，それが開戦の計画にも関わったためとみることができる。木戸は，開戦のしかたを次のように重視している。

> 彼より速に兵端を弥相発し候得は無此上次第，戦口尤妙なる而已ならす後来の為にも甚面白都合可有之（中略）一日も戦は急き候事なれども天下に示し候処は不得止干戈を以立と申処を相徹し度[14]

木戸は，「一日も戦は急き候事なれども」と，幕長戦争を不可避としながら，幕府の方から開戦させることが今後の為に都合がよいとする。他藩に対しては，長州藩が，止むを得ず幕府に抗戦することを徹底しようとした。木戸は，幕長戦争において，長州藩が正当性を得ることを企図していたのである。しかし，第二奇兵隊の暴動は，他藩に長州藩からの開戦とみなされかねない。それでは長州藩が正当性を失う恐れがあり，疑惑を解くための対処を講じる必要があったのである。また，木戸は，小田村素太郎に「従来兎角長州之事は何事も世間へ暴と而已相響き，大に御両殿様之御誠意に相反し，遺憾至極之事も不少，（中略）何分にも我之條理を尽し，彼之條理を失し候より終に天下之騒乱に立至り候処は精々世間へも相示し置度[15]」と主張している。木戸は，禁門の変以降，他藩に幕長戦争が長州藩の暴挙とみなされることを危惧していた。したがって，それを避けるために，幕府が「條理」を失う行動をとったことで戦争に至ることを世間へ示す必要があったのである。このように，幕長戦争における正当性を得るとともに，戦争が長州藩の暴挙ではないことを示すため，他藩には，長州藩の正当性をアピールしたのである。

さらに木戸は，開戦直前の6月6日，小倉口において奇兵隊軍監として指揮することになる山縣有朋に次のように述べている。

> 就而は決戦上に取り候而は一発相開け候上は元より神出鬼没，十分に進戦之大策も時宜を窺込候上に而は不相施而は不叶との事に而，更に忌戦之情より起り候と申事に而も無之，只一発に及ばはとつてかゝり度[16]

木戸は，幕府からの開戦によって「決戦」に至ったならば，積極的に戦うことを前提としており，開戦を目前にして，その態勢を整えておくことを主張しているのである。

以上のように，抗戦を想定していた長州藩は，開戦したならば積極的に戦う方針を採っていたのである。幕長戦争に至る過程においては，幕府には建前として

恭順を示し，他藩には正当性をアピールした。それは，積極的に戦う方針を採りながらも，幕長戦争における長州藩の正当性を得て，戦争が長州藩の暴挙ではないことを他藩に示そうとしたためである。

2．木戸の幕長戦争の位置づけ

第二次長州出兵段階において，木戸は，幕府の外圧に対処して国家を治めていく能力を見限っており，朝廷の権威回復に尽力しようとした[17]。薩長盟約においては，「実に此余之処は機会を不失が第一」[18]と，幕府と戦う「機会」を失わないことを第一としていた[19]。そして，幕長戦争を目前にして，積極的に幕府と戦う方針を採ったのである。では，木戸は，幕府との戦争に何を意図し，幕長戦争をどのように位置づけていたのだろうか。

木戸は，老中小笠原長行の飛脚が落とした書翰を入手し，これに基づいて幕府の方針を認識している。この書翰は，九州諸藩の指揮のため小倉に滞在していた小笠原長行の意向を，「小倉詰居」が江戸へ伝えようとしたものと推定される。木戸は，7月14日，この書翰にみられる幕府の方針を品川弥二郎に伝えている。以下，木戸が引用した部分によって，木戸が認識した幕府の方針を検討しよう。

> ①不日御討入も有之候に御一決相成，速に御成功を奉祈候，其上にては直様ヤカン（芸州ヤカンと云ふ事あり薩国之事か―木戸による割注）等も御征伐被遊候思召にて，此後は諸藩も命に悖り候ものは尽御誅征被遊御内慮に可被為在候，（中略）②京都も最早叡慮の御動は無之申事にて，是も一橋会津桑名等之御力にて，此後之所は右之御三家御周旋にて叡慮の処はいか様共相成候事の由，（中略）③何れ諸侯中に善悪とも幕府之命令に兎哉角申もの在之候ては，終に幕威不相立候に付，以後之処は速に御征伐を以て御立無之ては御回復六つケ敷云々（中略）④兎角是迄之如く叡慮之勅諚と申事にては幕威は不相立云々[20]

木戸がこの書翰から得た幕府側の方針は，主に以下の四点である。まず，傍線部①，幕長戦争が成功したならばすぐに薩摩藩を征伐し，その後も幕府の命令に逆らう藩に対して「誅征」を尽す。傍線部②，京都における叡慮は「一橋会津桑名等之御力」によって不動のものとなり，これからはこの「御三家」の周旋により叡慮は定まる。傍線部③，「幕威」の回復のため，幕府の命令に対して口を出す藩は速やかに「征伐」する。傍線部④，「叡慮之勅諚」により幕令を出していては「幕威」が立たない。木戸は，小笠原長行の書翰から，幕府が，逆らう諸藩を征伐し，朝廷を掌握して自らの権威回復を図る方針を採っていると認識したとみることができよう。

傍線部②の背景を確認しておこう。京都における叡慮とは，長州藩に対する追討令を指すと思われる。6月7日，一橋慶喜は，長州藩が処分令を期限内に受諾しなかったことを理由として，朝廷に「問罪の師を差向け」て「征討」すべきことを奏上しており，朝廷はそれを即日許可した[21]。これを受けた幕府は，8日，諸藩の軍に対して勅諚を下し，長州藩に宣戦の書を発している。このような情況に対して，木戸は，7月26日，品川に次のように述べている。

> 天朝，次に諸藩へ出し候書面類は尽御達に相成候哉，神州衰世之極とは雖も少しは憂国之諸侯も有之度，今日之事実に天朝之御微力を奉歎候外無之，長州之滅するよりも必長州滅したる後之天朝思ひ遣られ申候，（中略）先日差出候書面中に分奪中之書面類之内より書抜き候件々は何卒世間へ蔓延仕候様御計らひ有之度，少しは勤王士人之心得にも相成可申候[22]

木戸は，慶喜の周旋によって，朝廷が長州征討を許可したことを「天朝之御微力」と危惧し，長州藩が滅することよりも，朝廷のその後を安じている。幕府を見限り，朝廷の権威回復に尽力していた木戸は，幕府が朝廷を掌握することに危機を感じたのである。その対策として，すでに伝えていた幕府の方針を世間へ広めるよう品川に依頼し，諸侯が朝廷の権威回復に協力することを求めたのである。

幕府が権威回復を図っていることを認識していた木戸は，幕長戦争をどのように位置づけていたのだろうか。薩摩藩の長州藩支援を周旋していた中岡慎太郎は，木戸宛書翰で「此度之戦争ハ皇朝之盛衰ニ関係仕候義ニ付尽力致候様先生（木戸）之御書面モ御座候」[23]としている。木戸が，幕長戦争を朝廷の盛衰に関係する戦争と位置づけ，連携をとっていた中岡に尽力を求めていたことがわかる。木戸は，長州藩が幕府との戦争に勝利することが幕府の権威回復を阻止し，朝廷の権威を回復することにつながるとみていたと考えられる。さらに，中岡は，長州藩支援の要請に対する薩摩藩側の対応を，「吉井幸輔　幸之気色ニ而モ此度事去候ハヽ天下之大機去候故，是非尽力セネハ不成ト大ニ憤発之模様ニ御座候，尚此上乍不及私等モ尽力仕，是非薩ヨリモ此機会ヲ不失尽力致シ候様信西郷従道　吾等申談シ相尽可申ニ付，御存シ付之義ハ御腹臓ナク被仰越被下度奉存候」[24]と木戸に伝えている。中岡や薩摩藩の吉井幸輔等においても，幕長戦争を朝廷の盛衰に関わる機会と位置づけ，長州藩支援に積極的に尽力していたのである。

次に，木戸の意見が反映されていると思われるので，長州藩における幕長戦争の位置づけを検討しておこう。長州藩は，慶応2年6月，防長士民の名で薩摩藩と広島藩に，次のような歎願書を差し出している。

> 今般徳川氏ノ暴挙，防長ノ士民奮激，終ニ戦ニ相成候ハ，人ノ為ス所ニ非ス，天ノ為ス所，国家ノ不幸ニ非ス，国家ノ幸ト奉存候，東人如何様願出候トモ，苟モ和解ノ御沙汰無之様被遊度奉懇願候，此度ノ戦ハ毛利氏・徳川氏トノ私闘トハ毛頭不奉存，只管多年奉対天朝，跋扈無礼ヲ極メ，勅詔ヲ要シ，自己ノ志ヲ逞シク仕リ候モノヲ，天朝ノ御為ニ誅罰シ，御事業復古，癸（文久3年）亥七月已前ニ取回シ度存念ニ御座候，且今日ノ形勢夷人何時襲来仕候程モ難量候ヘハ，士民実戦調練仕置度候，且今日此侭ニテ和解止戦ニ相成候テハ，天朝ハ依然御微力，関東ハ弥夷人ニ屈シ，国家ノ衰弊益甚タシク，此時機ヲ失ヒ候テハ，恢復ノ期ハ有之間敷候，（中略）今日ノ事ハ人身ニ疾病アル如ク，人身ハ国家ナリ，疾病ハ東人ナリ，医師ハ防長ナリ，医師ニ任セ速ニ病根ヲ御絶チ不被遊候テハ，他日再発シ候節病人元気衰ヘ，快気六ケ敷奉存候，王政ノ恢復国家ノ存亡，此一事ニ拘リ候[25]

長州藩は，対外的危機情況において国家の情況が，朝廷は微力，幕府は諸外国に屈しているため，甚だしく衰弊したとみなしている。そして，この戦争が「和戦止戦」となっては国家の「恢復ノ期」はないとする。幕長戦争を「私闘」ではなく，衰弊の一途をたどる国家情況を打開し，国家を回復する機会と捉えているのである。また，国家を「人身」にたとえ，幕府を「疾病」，長州藩を「医師」として，長州藩が「病根」を絶たなければ「快気」はむずかしいとする。このように，長州藩においては，幕長戦争が「王政ノ恢復」と「国家ノ存亡」に関わる機会と位置づけられているのである。この歎願書は，長州藩が薩摩藩と広島藩に他藩への通達を依頼したものであるので，自らの正当性を示すことで戦争を有利に進めることを企図したものと考えられる。しかし，長州藩が，藩の存亡や政治的復権のためだけではなく，対外的危機情況における国家回復のため，諸外国に屈する幕府と対抗しようとした側面を指摘できよう[26]。

以上のように，木戸は，幕府と戦争することで，外圧に対処できない幕府の権威回復を阻止することを意図した[27]。そして，木戸とともに長州藩においては，幕長戦争を対外的危機情況において国家を維持するため，外圧に屈する幕府に代わって朝廷の権威を回復する機会と位置づけていた。したがって，幕長戦争では，逆らう諸藩を征伐することで権威を回復しようとする幕府と，対外的危機のなかでそれを阻止しようとする長州藩との対抗が存在していたのである。

3．幕長戦争の影響

幕長戦争は，6月7日に幕府側から開戦された。しかし，7月末には小倉口において九州諸藩の兵が引き揚げ，8月1日に小倉城が自焼した。一橋慶喜は，7月20日に将軍家茂が死去したため，名代として進発しようとしていたが，その報告を受けて止戦を決定することになる[28]。そして，9月2日には，幕府側の勝海舟と長州側の廣澤真臣等による休戦協定が結ばれる。事実上，この段階で幕長戦争は長州藩の勝利によって終結したとみることができる。このようにして幕長戦争に長州藩が勝利したことは，その後の政治情況にどのような影響を与えたのだろうか。

小倉口における長州藩勝利に対して，幕府側は，将軍辞退と諸侯召集に政策を修正する。慶喜は，将軍職を辞退し続け，将軍空位の政治情況が生じることになった[29]。このような政治情況のなかで，長州藩と薩摩藩の間では，次のようなやりとりが行われる。10月24日，薩摩藩主が，黒田嘉右衛門を正使として長州藩主に書翰を届けている。これは，「夏以来幕兵侵入処々戦争御勝利之段伝承仕奉恐賀候」と幕長戦争における長州藩の勝利を祝し，「先般も申上置候通後来尚又御互ニ御親睦申上候」と，これからも薩長両藩が協力していくことを呼びかけたものである[30]。これに対して長州藩主は，木戸を正使として薩摩藩に派遣し，木戸は11月25日に薩摩藩主に謁見している。長州藩政府において木戸と連携をとっていた廣澤真臣は，10月23日，長州藩に到着した黒田と面談し，その使命の旨趣を聞いた。そして，木戸に「実ニ彼国一統御国ヲ御信用被為在候次第，如何ニモ感銘之至奉存候」と伝えている[31]。また，薩摩藩が黒田の派遣を「徳川氏并列藩之嫌疑ヲ不憚，公然」と行ったとしていることから，両藩の信頼関係を窺うことができる。このような両藩のやりとりは，薩長盟約以来，改めて薩長両藩が「皇国」のために朝廷の権威回復に協力することを再確認するものであり，その連携を強化したものとみることができる。

薩摩藩側の意向は，廣澤が，黒田と面談した内容を木戸に報告した書翰にみることができる[32]。まず，一橋慶喜が梅沢孫七郎を九州に派遣して島津久光等の上京を図っていることに対し，薩摩藩は，「畢竟国事御相談ト歟何ト歟鄭重ニ見セ掛，其実ハ自身将軍ニ可被押立トノ私意ニ有之辺余程姦謀之至」と，幕府の「私意」とみている。そして，9月8日に朝廷が藩主等の上洛を24藩に命じたことに対しては，その命令の過程

を次のように批判している。

根元今日ニ当リ朝権御挽回之好機会ニ而候処，御条理不相立，第一御間近ク宮堂上方御正義之御方々御慎御免，続而太宰府五卿方同断御帰京之上條公杯ハ屹度御登用被為在，都合御基本相立候上ニ而朝廷ヨリ断然大小侯伯御召ト申筋ニ相成度事ニ而，只今御召抔ハ矢張是迄之将軍家顔ニ而，入サル朝廷之御沙汰ヲ取続候様ニ而ハ迚茂皇運御挽回之御目途相立申間布ト申議論ニ而

薩摩藩は，幕長戦争後に生じた将軍空位の政治情況を，「朝権御挽回之好機会」と捉えている。したがって，本来ならば「宮堂上方御正義之御方々」の謹慎を免じ，五卿の帰京と登用により朝廷の基本を立てた上で，朝廷が諸侯を召集することが必要であるとする。しかし，今回の諸侯召集では，幕府がこれまでのように「将軍家顔」で御沙汰を取り続けているため，これでは「皇運御挽回之御目途」も立たないことを問題としたのである。そこで，薩摩藩では上京を断わり，朝廷の基本を立てるために西郷隆盛と小松帯刀を上京させることにした[33]。このように，薩摩藩では，将軍空位の政治情況を朝廷の権威を回復する機会と捉え，慶喜の将軍就任を否定し，五卿の登用等によって朝廷の基本を立てることを企図している[34]。廣澤は，このような薩摩藩側の意向を伝え，「基本ヲ占メ候処相考候得ハ実ニ尤千万之事ニ而，何地迄モ薩ト御国トハ存亡興廃ヲ共ニ戮力同心之決心ニ相聞へ感服之至ニ御座候」と木戸に述べている。このことから，薩長両藩は，慶喜の将軍就任を否定し，朝廷の権威を回復するために朝廷の基本を立てることで意向が一致していたとみることができる。

以上のように，幕長戦争に長州藩が勝利したことで，将軍空位の政治情況が生じた。その情況に対して，長州藩と薩摩藩は，幕府の権威が衰退したと認識し，朝廷が権威を回復する機会と捉えて，その連携を強化したのである[35]。

4．木戸の対外的危機に対する国家構想

木戸は，朝廷の権威を回復することで，どのような国家体制を確立しようとしたのだろうか。まず，休戦協定以降，木戸が幕府に何を求めたのかを検討しよう。

木戸は，慶応3年1月15日，上国視察として在京していた品川弥二郎に，幕府に対する不信感を伝えている。

勝房州罷越候節，橋府弥御一新之御主意に付，何分にも差控居候様と之事に而，実に橋府の真に一新は則皇国之御為とも相考候事に付，兵士鎮静相控居申候処，已に百日余にも相成，却三征之説頻に相起り候を承知候而は，譎詐之策益被相行候事と被察申候[36]

慶応2年9月2日の休戦協定において，勝海舟は主に次のことを主張していた[37]。一橋慶喜が幕長戦争の処置を「関西諸侯大坂に招き衆議決定之上公平至当に」行うつもりであること。これまでのことは慶喜の「本意」ではなく，慶喜が幕府の「御一新」をするつもりであること。そして，長州藩が進軍を止めることを求めた。このような勝の主張に基づいて，木戸は，慶喜による幕府「一新」が「皇国之御為」になると認識し，長州藩兵の進軍を控えたのである。しかし，それから「百日余」経っても慶喜による「一新」はみられず，さらに第三次長州出兵の説が起こったことで，幕府に不信感をもったのである。

品川に幕府に対する不信感を伝えた同日，木戸は，「実に感服」したとして，松平慶永による幕府への建白を坂本龍馬に送っている[38]。この建白とは，慶永が慶応2年8月，一橋慶喜に建言したものと思われる。その建白は七項目からなり，「徳川家従来之制度を改め諸侯へ命令等被停尾紀両藩之如く可被成事」，「兵庫開港外国交際諸侯統轄金銀貨幣其余天下之大政一切朝廷へ御返上相成候事」等，将軍の大名への降下と朝廷への「大政」返上等を求めたものである[39]。木戸は，「公平至正之御主意，幕へも只管正にかへり候事を御進め有之申候」と，その内容に賛同している。このことから，木戸は，幕府が「一新」によって，朝廷に「大政」を返上することを期待していたとみることができる。朝廷の基本を立て，権威を回復することで，幕府に代わって朝廷が政権を握ることを企図していたのである。さらに，木戸は，坂本に「弥御一新に候はゝ薩など御合体候はゝ又別段之御事と為天下奉存候事に御座候」と，土佐藩の「一新」と薩摩藩との協力を求めている。それに対して，坂本も「当時ニテモ土佐国ハ幕之役ニハ立不申位之所ハ相ハコヒ申候，今年七八月ニモ相成候得ハ事ニヨリ昔之長薩土ト相成可申ト相楽ミ居申候」[40]と，土佐藩が幕府の権威回復を助けることはないとして，薩長土の連携を期待しているのである。この段階で，薩長土が連携して朝廷の権威を回復することを，木戸等が構想していたと言えよう。

木戸が，幕府に代わって朝廷が政権を握ることを企図したのは，どのような国家体制を構想していたからであろうか。慶応2年8月28日，木戸は，渡辺昇に「開国と申候而も今日之風体にては思きつたる事も十分には出来兼，只々蹙迫仕候のみ，十年之後を思候而も悲泣に堪不申候」[41]と述べている。幕府の統治する国家体制で「開国」したならば，諸外国のなかで思い

切ったこともできず，ただ「蹙迫」するしかないとし，十年後の日本の姿を慨歎したのである。さらに，「天地之累卵よりも危は他の事とのみ相心得，世間の事は何事も知らぬ顔に而生を偸み，其家来は々々々其僕は々々，何れの日か青天を望み候事出来申候哉」と，対外的に切迫した国家に目を向けない諸侯の視野の狭さを批判している。木戸は，このような国内情況では，対外的危機に耐えることができないことを危惧した。そこで，朝廷が政権を握り，国家が一致してその維持にあたる体制を構想したとみることができる。そのために，外圧に対処できない幕府が将軍職を辞し，朝廷に「大政」を返上することを求めた。つまり，幕府を排除することを志向したのである。

木戸と伊藤博文とは，連携をとりながら政治活動を行っており，国家構想を共有していたと考えられる。慶応3年1月5日，伊藤が木戸に宛てた書翰から，その国家構想をみてみよう[42]。伊藤も，「全体天下之人心勤王ニ傾ク者少ク，勢之強弱ニ随テ方向ヲ定ムト雖モ，斯ク危急存亡之境ニ臨，因循傍観モ限り之有るへき事と痛憤仕候」と述べ，対外的危機情況においても日和見的な態度をとっている諸侯を批判している。さらに，アメリカの例を挙げ，次のような対外的危機に対する姿勢を求めている。

> 米国独立之時ニ当テハ我日本之形勢と違ひ自国之人民ハ更ニ兵権もナキモノスラ人心之一致ヨリカヽル強敵をも打ヒシギ，各自国ヲ保ツ之忠情凝固シテ今日之盛大ヲ為スニ至ル，然況我国数千歳連綿タル天子を戴ナガラ，其大恩を忘却シテ阿諛ヲ事トシ，機会を失ひ候様至ラセ候ハ実ニ無人心者ト奉存候，我ヨリ夷狄と呼フ米人ニ向テ何顔カ有ント奉存候，如此日本ニテハトテモ王政復古抔ハ無覚束事と奉存候

伊藤は，アメリカ独立戦争の例を挙げ，日本の形勢とは違い，国家を維持するという「人心之一致」があったことを指摘している。それに対して，国内の「人心」は「勤王」に傾く者も少なく，諸侯は幕府に対して「阿諛」する情況であり，このような日本では「王政復古」などは覚束ないとする。伊藤は，対外的危機に対して国家を維持するため，「人心之一致」によって「王政復古」を実現することを必要としているのである。このように，木戸や伊藤は，対外的危機に対して国家を維持するため，「王政復古」を目指すことを共通認識としていたと考えられる。「王政復古」によって幕府を排除し，対外的危機情況に対して，朝廷を中心に国家が一致する体制を構想していたのである[43]。

おわりに

以上検討してきたことから次のことが言える。

長州藩は，幕長戦争に対して，積極的に戦う方針を採っていた。それと同時に，戦争における長州藩の正当性を得るとともに暴挙とみなされないために，幕府には建前として恭順を示し，他藩には正当性をアピールしていた。木戸は，幕府が，幕長戦争によって諸藩の征伐と自らの権威回復を図ろうとしていることを認識していた。よって，長州藩が幕府と戦争することで，幕府の権威回復を阻止しようとした。木戸は，幕長戦争を，対外的危機に対して国家を維持するため，外圧に対抗できずに失政を重ねる幕府に代わって，朝廷の権威を回復する機会と位置づけたのである。

長州藩の勝利による幕長戦争終結後，将軍空位の政治情況が生じた。長州藩と薩摩藩は，その情況を幕府の権威が衰退したと認識し，慶喜の将軍就任を否定して，朝廷が権威を回復する機会と捉えた。そして，両藩は，朝廷の権威回復に協力することを再認識して，その連携を強化した。また，木戸は，この段階で，幕府が将軍職を辞して朝廷へ「大政」を返上することを求めている。それは，木戸等が，対外的危機に対して国家を維持するため，「王政復古」を共通認識としており，幕府を排除し，朝廷を中心に国家が一致する体制を構想していたためである。

以上のように，木戸は，幕長戦争段階において，朝廷の権威を回復するために，幕府の「大政」返上による「王政復古」を目指した。それは，武力による討幕の志向には至っていないが，対外的危機に対する国家構想において，幕府の排除を志向したとみることができる。

【註】

1）田中彰『明治維新政治史研究』（青木書店，1963年），芝原拓自『明治維新の権力基盤』（御茶の水書房，1965年）。

2）井上勲『王政復古』（中央公論社，1991年），家近良樹『幕末政治と倒幕運動』（吉川弘文館，1995年），佐々木克「大政奉還と討幕密勅」（『人文学報』80号，1997年），青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館，2000年）。

3）前掲『明治維新と国家形成』。

4）筆者は，幕末期の政治過程を慶応元年4月から慶応2年1月までの第二次長州出兵段階，慶応2年1月から慶応3年1月までの幕長戦争段階，慶応3年2月から10月までの慶応3年段階の三段階に設定し，

各段階における木戸孝允の政治構想を考察することで，討幕志向の時期を解明することを試みている。これまでに次のことを明らかにした。第二次長州出兵段階において，木戸は，幕府の外圧に対処して国家を治めていく能力を見限り，薩長盟約以降，薩摩藩と共に国家維持のために朝廷の権威回復に尽力しようとした（拙稿「幕末期における木戸孝允の対幕意識－第二次長州出兵段階を中心として－」『山口県地方史研究』第85号，2001年）。慶応３年段階において，木戸は，兵庫開港をめぐって，幕府の外交交渉では国家が維持できないこと，幕府が朝廷を掌握していることを認識して「王政復古」を急務とした。そして，四侯会議の段階で武力討幕を志向した（拙稿「幕末期における木戸孝允の政治構想－慶応三年を中心として－」『史学研究』237号，2002年）。

5）坂本龍馬は，「当時小五郎ハ大ニ用られ国論なとも取定候」（慶応元年五月五日渋谷彦助宛坂本龍馬書翰，『鹿児島県史料　玉里島津家史料　第四巻』鹿児島県，1995年，247頁）と，木戸の長州藩における中枢的立場を評価している。

6）『修訂防長回天史』七（マツノ書店，復刻1991年）174頁。

7）前掲「幕末期における木戸孝允の対幕意識－第二次長州出兵段階を中心として－」

8）慶応２年４月７日付廣澤真臣宛中村誠一・藤田與次右衛門・山田宇右衛門・木戸孝允書翰（『木戸孝允文書』二〈日本史籍協会叢書〉東京大学出版会，復刻1971年，170頁）。

9）慶応２年４月19日付小田村素太郎等宛中村誠一・廣澤真臣・木戸孝允書翰（同上，179頁）。

10）慶応２年４月18日付備前藩への開申書草案（同上，178頁）。

11）慶応２年４月24日付木戸孝允宛井上馨書翰（「公宛諸士尺牘謄本」九，木戸家文書，宮内庁書陵部蔵）。

12）前掲『修訂防長回天史』八（マツノ書店，復刻1991年）353頁。

13）廣澤真臣等においても，「此度之始抹相片付候上ハ，少しは世間江之申開も相立事」と，厳罰による他藩の理解を期待している〔慶応２年４月28日付槙村半九郎宛廣澤真臣・山田宇右衛門書翰（国広哲也編『長州藩第二奇兵隊脱隊暴動史料集』，光地方史研究会，1977年，３頁）〕。

14）慶応２年６月４日付林友幸等宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，194-195頁）。

15）慶応２年４月３日付小田村素太郎宛木戸孝允書翰（同上，165-166頁）。

16）慶応２年６月６日付山縣有朋宛木戸孝允書翰（同上，197頁）。

17）前掲「幕末期における木戸孝允の対幕意識－第二次長州出兵段階を中心として－」

18）慶応２年１月23日付坂本龍馬宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，140頁）。

19）三宅紹宣氏は，薩長盟約において，木戸が戦機を失わないように決戦の決意を固めていることを指摘している（三宅紹宣「薩長盟約の歴史的意義」，『日本歴史』647号，2002年）。

20）慶応２年７月14日付品川弥二郎宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，212-215頁）。

21）前掲『修訂防長回天史』八，185-187頁。

22）慶応２年７月26日付品川弥二郎宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，220-221頁）。

23）慶応２年６月木戸孝允宛中岡慎太郎書翰（「公宛諸士尺牘謄本」十，木戸家文書，宮内庁書陵部蔵）。

24）同上。

25）慶応２年６月防長士民ヨリ薩州及ビ芸州ノ両藩ヘ差出タル書面（『鹿児島県史料　忠義公史料　第四巻』鹿児島県，1977年，226-227頁）。

26）小野正雄氏は，他の歎願書を挙げ，「上天朝を奉戴し下幕府を扶け，早く姦邪を誅鋤し」（前掲『修訂防長回天史』八，223頁）という文言から，長州藩は「幕閣の中の奸賊の糾弾」を求めることで抗戦の正当性を主張しており，「朝廷・幕府に対する抵抗」や「倒幕」ではなかったとしている（小野正雄『幕藩権力解体過程の研究』，校倉書房，1993年，257-258頁）。しかし，本文で示した歎願書では，長州藩は幕長戦争が「和解止戦」となっては「国家ノ衰弊」となるとして幕府との戦争を望んでおり，国家存亡の情況において外圧に屈する幕府への非難と「抵抗」があったと考えられる。

27）前述したように，青山氏は，長州藩の「征長戦争徹底抗戦」の意図を政治的復権を勝ち取ることとしている（前掲『明治維新と国家形成』，202頁）。盟約おいては，長州藩が薩摩藩とともに「皇国」のために尽力する上で政治的復権を必要としているが，「いづれ之道にしても今日より双方皇国之御為皇威相暉御回復に立至り候を目途に誠心を尽」（慶応２年１月23日付坂本龍馬宛木戸孝允書翰〔前掲『木戸孝允文書』二，139頁〕）すと，復権に関らず盟約後に両藩が朝廷の権威回復に尽力することが定められている。このことから，盟約の目標は朝廷の権威回復であり，長州藩は，政治的復権の成否に関らず，幕長戦争において幕府の権威回復を阻止するという手段によって朝廷の権威回復に尽力したと考えられる。

28)『続再夢記事』五（〈日本史籍協会叢書〉東京大学出版会，復刻1974年）342-348頁。

29) 将軍空位の政治情況は，幕長戦争の影響を受けていることが松平慶永と一橋慶喜のやりとりにみることができる。松平慶永は，長州藩勝利を幕府の「大権」失墜に尽力する情況ではないと捉え，一橋慶喜に，家茂の死去を公にして将軍職は辞退し続けること，幕府の失体を朝廷に詫び，「朝命」を以って広く諸侯に諮り，国是を定めることを進言している（慶応２年８月13日付一橋慶喜宛松平春獄書翰〔前掲『続再夢記事』五，336頁〕）。そして同時に，将軍の大名への降下，朝廷への「天下之大政」返上等を建白した（前掲「続再夢記事」五，334-335頁）。これに対して慶喜は，「御卓論通り取計候より外無之」として，進言を受ける旨を慶永に伝えている（慶応２年８月13日付松平春獄宛一橋慶喜書翰〔『続再夢記事』五，337頁〕）。このように，長州藩勝利に対して幕府側が，幕府の権威回復（「大権」保持）から，将軍辞退と諸侯召集に政策を修正したことで将軍空位の政治情況が生じた。将軍空位時代について井上勲氏は，慶喜の将軍職辞退は「将軍職の裁量能力拡大を目的」としたものとし，幕長戦争の敗北が「武力をもってする諸侯統制方式の破産を明示」したことで，諸侯召集によって「朝廷及び諸侯の積極的支持のもとに」将軍宣下を受けることを新たな諸侯統制方式としたことを指摘している（井上勲「将軍空位時代の政治史」『史学雑誌』第77編11号，1974年）。

30) 慶応２年10月15日付毛利敬親・元徳宛島津久光・忠義書翰（前掲『大久保利通文書』一，〈日本史籍協会叢書〉東京大学出版会，復刻1967年，408頁）。

31) 慶応２年10月23日付木戸孝允宛廣澤真臣書翰（「公宛諸士尺牘謄本」十一，木戸家文書，宮内庁書陵部蔵）。

32) 同上。

33) 家近良樹氏は，10月26日に小松帯刀・西郷隆盛が上洛して程なく，薩摩藩の方針は対幕協調路線に転換されたとしている（前掲『幕末政治と倒幕運動』，161-162頁）。

34) 大久保利通は，内大臣近衛忠熙に「朝威興張千載一時之大機会，再難得一挙ニ而天下有志之者雀躍飛揚仕居候時期ニ御座候」（慶応２年10月付近衛内大臣宛大久保利通書翰〔前掲『大久保利通文書』一，426頁〕）と，「有志之者」が将軍空位の政治情況を朝廷の権威回復の機会と捉えていることを伝えている。そして，幕府が「阿諛之藩」に意通することで諸藩にも「将軍推任之説」が起こっているとして，慶喜の将軍就任を「朝廷御安危之境」として危惧している。

35) イギリス公使館通訳のアーネスト・サトウは，西郷・小松との談判において，幕長戦争に敗北した幕府の「空権」を指摘している（慶応２年12月９日付小松帯刀宛西郷隆盛書翰〔『西郷隆盛全集』二，大和書房，1977年，179-181頁〕）。このことから，将軍空位の情況は，井上勲氏が指摘するように幕府の諸侯統制の方針転換のためであっても，国内外には幕府の権威失墜を示すことになったとみることができる。

36) 慶応３年１月15日付品川弥二郎宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，267頁）。

37) 前掲『修訂防長回天史』八，565-572頁。

38) 慶応３年１月15日付坂本龍馬宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，269-270頁）。

39) 前掲「続再夢記事」五，334-335頁。しかし，慶永は，慶喜に「徳川家之御盛名も千載に伝り可申候」とべており，「大政」の朝廷返上を徳川家存続のためとしたと思われる（慶応２年８月13日付一橋慶喜宛松平慶永書翰〔前掲『続再夢記事』五，336頁〕）。

40) 慶応３年２月14日付木戸孝允宛坂本龍馬書翰（「公宛諸士尺牘謄本」十二，木戸家文書，宮内庁書陵部蔵）。

41) 慶応２年８月28日付渡辺昇宛木戸孝允書翰（前掲『木戸孝允文書』二，225-226頁）。

42) 慶応３年１月５日付木戸孝允宛伊藤博文書翰（「年度別書翰集」三十三，毛利家文庫，山口県文書館蔵）。

43) 三宅氏は，朝廷を中心とした国家構想が薩長盟約に関係した者の共通認識となっていたことを指摘している（前掲「薩長盟約の歴史的意義」）。

（主任指導教官　三宅紹宣）